ISSN 2188-7330

ふみ

「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画」ニューズレター

第17号
2022年1月発行

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構
国文学研究資料館
古典籍共同研究事業センター

CONTENTS

日本文学とデジタル・ヒューマニティーズ
一般財団法人人文情報学研究所　主席研究員　永崎　研宣 ……❶〜❸
共同研究「歴史資料を活用した減災・気候変動適応に向けた文理融合研究の深化」について
国文学研究資料館　教授　西村　慎太郎
茨城大学大学院理工学研究科　教授　小荒井　衛 ……❹〜❺
TEIから広げる古典籍デジタルテキスト基盤の未来
北海学園大学人文学部　講師　岡田　一祐 ……❻〜❼
鶚軒文庫のひろがり ―東京大学総合図書館蔵・鶚軒土肥慶三旧蔵書
国文学研究資料館　准教授　多田　蔵人 ……❽〜❾
新日本古典籍総合データベースの文庫情報
四天王寺大学人文社会学部　教授　須原　祥二 ……❿
こんな古典籍があった！ ～拠点大学古典籍画像紹介～ ……⓫
トピックス ……⓬

日本文学とデジタル・ヒューマニティーズ

一般財団法人人文情報学研究所　主席研究員　永崎（ながさき）　研宣（きよのり）

日本文学とデジタル・ヒューマニティーズ（以下、DH）、というテーマとともに、本稿の執筆依頼をいただいた。日本文学についてはまったくの素人であり、少しずつ勉強をしているところではあるものの、勉強をすればするほど、日本文学の全貌を把握することの困難さが現前に迫ってきているところである。そのようなことで、今回は、日本文学については括弧に入れた状態で少し周辺状況についての話をさせていただきたい。

日本文学とDH、というテーマとしてまず考えられるのは、日本文学の研究を踏まえつつ、それを支援・発展させるためにデジタル技術を活用することである。現在、国文学研究資料館で推進されている「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画」やその後継事業がその典型だろう。これまでは紙媒体として手元に置かなければ見ることができず、購入や訪問調査などのために様々な手続きを踏まなければならなかった資料が、手元のパソコンをインターネットに接続するだけで自在に閲覧できてしまうというのは、研究支援としてはわかりやすいものだ。現物資料とは比べるべくもないものの、一般的な影印本に比べれば、カラーのデジタル画像がもたらす情報と利便性はかなり大きなものである。高級感はあるものの、大きくかつ重く、発色がきれいでもいずれは退色してしまう影印本に対して、数や重さを気にせずにどこでも閲覧でき、細部を部分拡

日本文学とデジタル・ヒューマニティーズ

一般財団法人人文情報学研究所　主任研究員　永崎　研宣

大でき、撮影した時点での色や形は褪せることも崩れることもない。影印本にも良い点はあるにせよ、デジタルがこの面でもたらす恩恵は一定の評価ができるはずだ。現物資料との比較となるととてもかなわないが、高精細デジタルマイクロスコープによるアプローチや化学的な分析など、現物資料に対する肉眼を超えたアプローチも出てきており、これらもデータとしてはデジタル技術の適切な利用が鍵となる。

とくに文学作品の場合、テキスト検索ができることは利便性の向上に少なからず貢献する。たとえば『新編国歌大観』の検索を通じてその恩恵を知る人は多いだろう。テキストデータの検索は、単に任意の単語や言い回しを容易に発見できるだけでなく、登場する語の傾向などを確認することで主張の根拠や新しい解釈の手がかりなど、様々な道をもたらす可能性がある。和歌だけでなく、日本文学の散文のテキストデータもＷｅｂ上には様々に公開されているが、学術利用に耐えるものはどれくらいあるのだろうか。そもそも学術利用に耐えるとはどういうことか、と考えるなら、学術利用にも様々なアプローチがあり得ることから、むしろ一律に扱わず、その質に応じて利用の指針を立て、それにあわせて利用の仕方を変えるという方向性も検討の俎上に載ってくるだろう。では、そのようなテキストデータベースをどのようにして構築するのか。現在よく注目されるようになっているのは、クラウドソーシング、すなわち、ネット上の善意による翻刻としての「みんなで翻刻」と、人文学オープンデータ共同利用センター及び凸版印刷でそれぞれに進められているくずし字ＯＣＲである。いずれも学術的にそのまま依拠できるようなデータが作られているわけではないが、それぞれにある一定の品質のデータが提供されつつあるため、今後は、そのようなレベルのデータをどのように使うのか、という指針とともにデータを増やして発見可能性を高めていくことが必要となっていくだろう。一方で、まだ提案の段階ではあるが、メールマガジン『人文情報学月報』一二二号（二〇二一年九月）の巻頭言「日本古典テキストデータベース構築への期待」において川平敏文氏が示したのは、「塵のように無価値なものでも、数量が集まれば何かの意味が出てくる、という発想」に基づく、「塵袋（ちりぶくろ）」のような場としてのテキストデータベースである。研究者の手元で作成されたテキストデータは、翻刻も校訂本文も含め、様々なものがあるだろう。完全に正確なものでなくてもよいという前提でそれらを収集し検索できるようにすれば、一定の有用性は確保できる。

デジタルテキスト構築を検討する上での難しさの一つは、完成形が一つではないにも関わらず、そのことが十分に認識されにくいという点である。紙の本であれば、影印と翻刻と校異情報付きの校訂本は別々のものとして扱われ、さらに単語毎に品詞情報がついたものがあったとしたらそれはまた別種のものとして扱われている。しかし、デジタルテキストの場合、そのような用途に応じた区別という認識がされにくい。すべてを一つのテキストとして作成することも技術的には可能であるという、デジタルならではの性質がわかりにくさに拍車をかけているようにも思われる。当たり前のことと思われるかもしれないが、何でもできる便利なものを目指すというよりはむしろ、一つであるにせよ複数であるにせよ、用途をきちんと明示しそれを共有しながら検討を進めることが肝要だろう。一度作ってからそれをさらに発展させるというロードマップを意識すると、取り組みやすくなるかもしれない。た

とえば、筆者が技術担当として関わっているＳＡＴ大蔵経データベース研究会（代表・東京大学下田正弘教授）では、「大正新脩大蔵経」を全文検索可能なものとするために、一九九四年から二〇〇七年にかけて、漢字・仮名・悉曇を含む約一億字のテキストデータベースを構築し、二〇〇八年にＷｅｂサービスとして提供した。その後、依拠した「大正新脩大蔵経」を、よりうまく反映しつつ利便性の高いものにするために、Unicodeに登録されていない漢字や悉曇の外字をUnicodeに登録することに取り組み、悉曇の異体字や三千字以上の漢字を登録し、さらにこれを進めている。その一方で、異文情報をより利便性の高い状態で扱えるようにして学術的有用性を高めるべく、典拠の確認をＷｅｂブラウザ上で容易にできるように、国際的なＷｅｂ画像相互運用の規格ＩＩＩＦ（International Image Interoperability Framework）に準拠した諸本の公開とリンクを行うとともに、国際的な人文学向けテキスト構造化のルールであるＴＥＩ（Text Encoding Initiative）ガイドラインに準拠した異文情報の記述を採り入れた全面的なフォーマットの改良に取り組んでいるところである。ここには多様なニーズを実現する技術的可能性の検討と実装、構築作業に対応可能な人材の育成といった様々な課題があり、二〇一九年時点での状況は『デジタル学術空間の作り方』（文学通信、二〇一九年刊、オープンアクセス版あり）にて報告されている。日本文学研究においてもこの取り組みが何らかの形でお役に立つことがあれば幸甚である。

一方、日本文学研究に限らず、人文学研究においては、ただ書いてあることだけでなく、書いてあることから導き出し得る言説や思想の検討もまた重要である。テキストデータベースでは書いてあることしか見つけられないと思われがちだが、近年のデジタル技術においては、直接には書かれていない含意を検出するための技術開発も盛んになってきており、内容読解に関わる研究の支援として期待されるものがある。これもまた、テキストデータベース構築がもたらし得る利便性と考えることもできるだろう。

また、デジタル技術を用いて日本文学のテキストを日本文学研究以外にも役立てるという取り組みもあり得る。国立極地研究所との共同研究によりオーロラの情報を歴史的典籍のなかに確認できたことは大きな注目を浴びた。「みんなで翻刻」やくずし字ＯＣＲの開発は、日本文学研究から見ると便利なツール作りだが、情報工学分野やＤＨでは着実な研究成果である。他分野との協業により、日本文学研究の成果ではない、しかし有用な研究がデジタル化を通じて促進されるようになってきているのである。今後、書誌情報と結びつけられ時空間に位置づけられたテキストデータが増えてくれば、日本文学研究だけでなく、さらに様々な観点からの研究成果が産み出されていくことが大いに期待される。

最後に、日本文学とＤＨの研究領域について少しだけ述べておきたい。欧米のＤＨにおいては、文学研究が重要な役割を果たしてきており、とりわけ米国ではＭＬＡ（Modern Language Association）が二〇〇〇年にＤＨの成果を評価するためのガイドラインを策定するなど、文学研究におけるデジタル技術の適用において大きな役割を発揮するとともに、テキスト読解の深い知見を活かしてＤＨを牽引してきた。日本では長らく、文字の扱いなどの問題から文学研究がデジタルに踏み込むことは困難であったが、日本語での学術研究のためのデジタル環境がいよいよ整備されつつある現在、日本文学研究がそのポテンシャルをデジタル環境においても発揮し、日本の人文学を牽引していくことを期待したい。

【異分野融合共同研究】

共同研究「歴史資料を活用した減災・気候変動適応に向けた文理融合研究の深化」について

国文学研究資料館　教授　西村慎太郎（にしむらしんたろう）
茨城大学大学院理工学研究科　教授　小荒井　衛（こあらい　まもる）

「歴史資料を活用した減災・気候変動適応に向けた文理融合研究の深化」は、国文学研究資料館（以下、国文研）と茨城大学地球・地域環境共創機構（GLEC）とで二〇二〇年から展開している共同研究です。GLECとは、地球環境及び地域環境を対象として文理融合の総合的な研究を推進し、環境問題の解決を目指して持続的な環境の共創に関する教育研究拠点で、二〇二〇年に設立しました。また、国文研と茨城大学は、GLECの前身である地球変動適応科学研究機関（ICAS）と二〇一七年五月に学術交流協定を締結し、二〇一七～二〇一九年度に共同研究「歴史資料を活用した減災・気候変動適応に向けた新たな研究分野の創成」を行いました。今回の共同研究「歴史資料を活用した減災・気候変動適応に向けた文理融合研究の深化」はICASとの共同研究をさらに深化させることを目指しています。

この共同研究では地球規模で広がる気候変動に対してどのような適応戦略を進めることが必要となるのかという観点のもと、古文書・古典籍などを用いつつ、歴史を参照し未来への適応策に活用することを研究目的としています。国文研とGLECの人文・社会科学系の研究者は気候変動や災害に関する歴史資料・データの発掘、実際の被災地における歴史資料のレスキューなどを行ない、GLECの理工系の研究者は気候変動影響評価や適応効果評価、および過去の地震災害、水害、気候変動や古気候の実態把握と原因解明を行っています。現在では茨城県域や国文研基幹研究「地方協創によるアーカイブズ保全・活用システム構築に関する研究」でフィールドとしている長野県、水害が多発しており現在でも治水政策が課題となっている山梨県などを中心に研究を進めています。

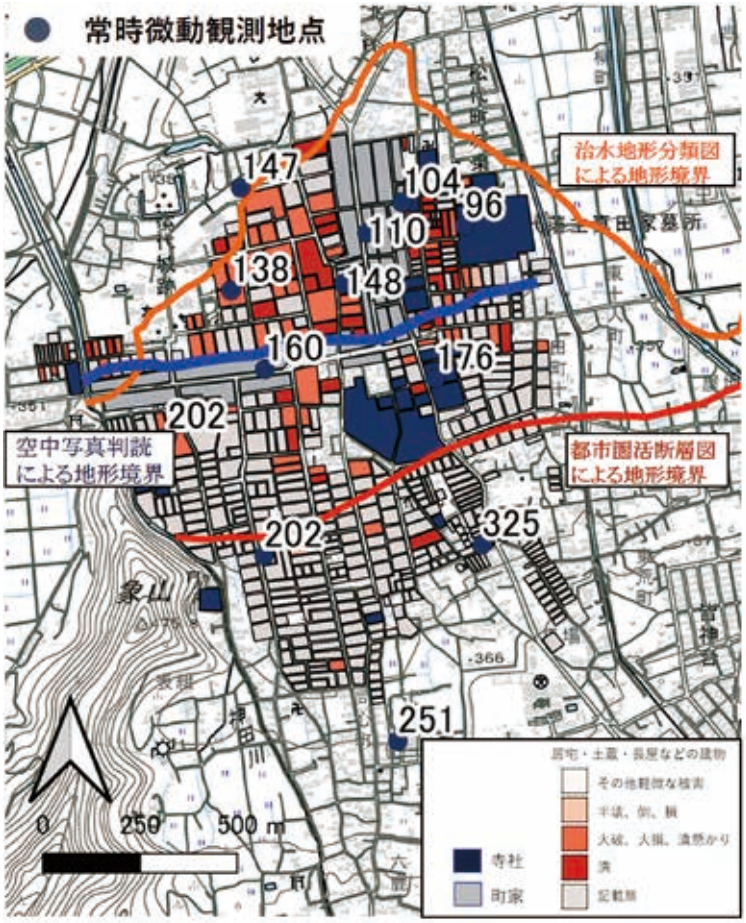
二〇二〇年度は新型コロナウイルス（covid-19）の影響で十分な研究や成果報告が十分にできず残念でしたが、筆者は近世甲斐国の川除神事のひとつである西御幸をめぐる様相についての研究成果報告を現地で行いました（「甲州西御幸一件における神社・寺院・氏子」、二〇二一年三月二十八日、甲州史料調査会例会）。

（西村慎太郎）

共同研究の一テーマとして、信濃川断層帯の地震被害と地形・地質との関係の解明を行っています。事例として、一八四七年善光寺地震における長野市松代の被害について紹介します。国文学研究資料館にアーカイブされている真田家文書から、真田家城下町である長野市松代の善光寺地震の武家屋敷の被害状況を記述した新たな文書を見つけ、記述内容を松代街並之図に落とし、建物被害状況図を作成しました。空中写真判読による地形分類や、地盤の揺れやすさを計測する常時微動観測（防災科学技術研究所との共同研究）を行い、地理情報システム（ＧＩＳ）を用いて建物被害情報と重ね合わせました。その結果を図に示します。建物被害があった場所に暖色系の色を付けてあり、濃い赤色が特に被害が酷かった場所です。松代は南側が扇状地で北側が千曲川の氾濫平野になっていますが、既存の情報によりその境界は違っていました。写真判読の結果、その境界を図中の青線で示す位置と判断しました。図中の数値は、常時微動観測地点の地下30ｍまでの平均的なＳ波速度を示しており、200m/s以下は比較的揺れやすい地盤、特に100m/s以下は軟弱な地盤になります。建物被害が酷かった松代北東部が、地形分類では氾濫平野に該当し、Ｓ波速度が100m/s程度の軟弱な層が厚く堆積していることが判りました。一方、建物被害が比較的軽微な南部は、扇状地でＳ波速度が比較的大きなことが判りました。

他にも、水戸市の「大高氏記録」や土浦市の色川氏日記「家事志」から江戸時代の茨城の気温を推定した研究、二〇一五年の鬼怒川水害の古文書レスキューで発見された「猪瀬家文書」に記載されていた三坂新田地区の惣囲堤に関連して、同地区で常時微動計測を行い地下構造や堆積環境を推定した研究などがあります。

（小荒井衛）



図

【研究開発系共同研究】

TEIから広げる古典籍デジタルテキスト基盤の未来

北海学園大学人文学部　講師　岡田（おかだ）　一祐（かずひろ）

当事業の「TEIの導入」共同研究（以下、本共同研究）では、TEIを用いて古典籍のデジタルテキスト基盤形成の可能性を探っている。この場を借りて、そのようなものを形成する意義や成果をお伝えしたい。

TEI（Text Encoding Initiative）は、人文学におけるテキストの構造的な意味をコンピューター向けに記録する（符号化する）ための方法論を議論する運動（TEI協会）であり、同時に、議論の産物である符号化の指針でもある（TEIガイドライン）。

テキストの構造的意味とは、テキストの各部分の意味と言ってもいい。たとえば、段落や章はテキストのある部分がまとまっていることを表す。同様に、「著者」という概念も、テキストには書かれていない点で、外部の意味と言えるだろう。TEIでいう意味とは、そのようなものである。

根本的な発想としてはいたって常識的であるところに陥穽がある。たとえば、『ふみ』に文章の寄稿を依頼されたとする。私たちは、ワープロで新しくファイルを作り、冒頭に題名を置き、名前や所属などを下に寄せて書いてから、本文を書きはじめる。本文は段落に分けながら書き、最後にファイル名を付けて保存するだろう。たかがこんなことにもコンピューターと私たちとでは理解が違うのである。

私たちは、できあがった原稿を見てどれがどの要素かという構造を即座に理解できる。見た目にまとまっているからだ。では、機械にとっても右の要素は同じように意味をなすだろうか。じつは、このなかでは、ファイル名と改行くらいしか意味をなさない。原稿の一行目に簡潔な表現があれば、私たちはそれを題名と受け取って疑わないが、そういう決まりはない以上、機械はそうとは受け取れないのである。考えてみれば、私たちだって一行目にあるから題名だと思うのではなく、そういう見た目だからそう思うのであって、文意を理解できないワープロに罪はないことになる。

ワープロ程度であれば問題もさしてないが、テキストデータベースとして文献研究の出発点にしようと思うと、コンピューターに構造が理解させられないことは、構造に基づいた処理をしてもらえないということになる。たとえば、本文と見出しを区別した検索ひとつとっても、構造を分けて扱える必要があるのである。

そのように文章構造を符号化するとテキストデータ処理の可能性が一挙に広がり、TEIは、人文学資料のテキストのために、な

るべく汎用的に符号化できるようにする取組みである。汎用的であるとは、さまざまな文献で緩やかに共通する構造を共通の語彙で符号化できるようにということである。とはいえ、これまでの成行きから、西洋の文献にTEIが偏りがちだったのは否めない。日本語文献への適用にあたっては、そのままで当てはめられるかの検討が十分でなかった。

そして、二〇一七年に永崎研宣氏（人文情報学研究所）の尽力により、TEI協会に東アジア・日本語分科会が設置され、TEIにおける日本語文献符号化の可能性が本格的に議論されはじめた。稿者（当時、国文研特任助教）も本共同研究から参画し、古典籍をTEIが問題なく扱えるか議論してきた。

同分科会の活動は、TEIの日本における普及活動と、TEIによる日本語文献の符号化の促進が主たるものである。前者は、TEIの勉強会開催や技術資料の翻訳などがある。後者としては、TEIによる日本語文献の符号化の指針を作成し、その際TEIに不足があれば、その改善をTEI協会に求めていくことがある。以下、古典籍の文献の符号化の取組みと、日本語資料を符号化するうえで不足していた振り仮名（ルビ）要素の拡充について述べたい。

本共同研究では、古典籍の符号化指針を作り、その実践例の作成も併せて行った。作成した方針をもとに、手始めに幾浦裕之氏（当時、国文研機関研究員）に『十六夜日記』等の本文作成と符号化をお願いした。本文・指針ともに永崎氏や当館の研究者の監修を受け、同分科会のウェブサイトで公開しているのでご参照いただきたい（https://github.com/TEI-EAJ/jpn_classical）。

類似の取組みに、「校異源氏物語テキストデータベース」がある。これは、源氏物語の異文を集成した労作『校異源氏物語』を永崎氏等が主導して符号化したものである。それから見ると、本件はごく短いが、符号化指針を作成し本文作成から行ったという点でTEIをとっつきやすくした試みだと自負する。この指針は、仮名文学以外にも適用できるよう考慮したが、是非お試しいただきご意見を賜りたい。

日本語文献の実情にあわせてTEIそのものの改善も行っている。それは、これまでTEIは汎文化的な文章構造を標榜して振り仮名（ルビ）のような文化特有の文章構造に対応してこなかったが、同分科会から拡張を提案し、協会での議論の末に取り入れられたことである。

古来、日本では漢文に仮名等で訓みを添えてきたが、それが日本語文でも用いられるようになったのがルビである。当て字などでは、本文の漢字と同等かそれ以上にルビのほうが重要ですらある。TEIでは、注釈を符号化することはこれまでもできたが、ルビのような単なる注釈とは言えないものをこれまで扱えなかった。この拡張により、符号化できる日本語文献の幅を広げられたものと思う。

このように、本共同研究では、TEIを通じてデジタルテキスト基盤を作っていく仕組みに取り組んでいる。これからもご支援を賜りたい。

鶚軒（がつけん）文庫のひろがり ―東京大学総合図書館蔵・鶚軒土肥慶三旧蔵書

国文学研究資料館　准教授　多田（ただ）　蔵人（くらひと）

作家・随筆家の丸谷才一は、博徒にして漢詩人として知られた日柳燕石の詩集を探すために、近代文学研究者の前田愛に貰った「鶚軒文庫蔵書目録」によって知った鶚軒文庫を探索したことを記している。鶚軒こと土肥慶三、東大医学部教授であり大蔵書家として知られたこの人物の文庫は現在、国立国会図書館と東京大学総合図書館にそれぞれ所蔵されており、国会図書館の蔵書は同館のデジタルライブラリーにおいてその一部がオンラインで閲覧可能である。そして東京大学の蔵書は国文学研究資料館の歴史的典籍NW事業において、一部がオンライン画像によって提供されることとなった。二つに分かれた鶚軒文庫はオンライン上でふたたび結びつき、一望のもとに見わたせる日が近づきつつある。

土肥慶三の蔵書とその蒐集の方向については、彼自身の『鶚軒遊戯』（昭和二、改造社）および『鶚軒先生遺稿』上下巻（昭和七、戊戌会）、また門弟によって編まれた『鶚軒先生追懐文集』（昭和十二、戊戌会）によってうかがえる。土肥は西洋近代医学の道を歩んだ人でありながら本草学を基幹とした江戸以来の医学の歩みに目を向けており、自然その蔵書は医学を中心とした幕末明治期漢詩文の世界、そして儒者たちが戯れに（半分は真面目に）作りなした戯作の世界へと相わたる広がりを持つことになった。鶚軒文庫は「医」を基点として江戸・明治・大正の「文」の世界を見わたすことのできる、貴重な資料群である。

ただし近世医学書の本流に属するところは残念ながら稿者の手にあまるから、「日本文学」の領野が鶚軒文庫からどのような刺激を受けられるか、二、三ご紹介することにしよう。国会図書館蔵書では、たとえば『江戸繁昌記』で知られる寺門静軒の『新潟富史』（内題『新潟繁盛記』詩文-2942）への、大沼枕山の評を小野湖山が自評とともに記した書入れが日本漢文史上の一級資料。「狂」に生き、都人士の愚をあばきだしてみせた静軒と、江戸東京のまんなかにあって「学」をことごとした枕山・湖山の思いが交錯する一書である。

東京大学総合図書館蔵書からは、『伊澤蘭軒先生遺稿』（写、請求記号DIG-TOKY-310）と元輪内記評『江戸儒医評判記』（明和九刊、外題『儒医評林』、請求記号DIG-TOKY-188）を挙げておこう。伊澤蘭軒は森鷗外の同名の史伝小説で知られた江戸の儒者である。土肥は『鶚軒遊戯』で富士川英之の『日本医学史』への鷗外序文に言及している。医学部の後進でもあった土肥が、鷗外の文業に敬意を払い、さらに資料探索にもつとめていたことを示す一書。もちろん蘭軒伝の資料としても貴重である。『江戸儒医評判記』は名前は医者の評判記のようだがその実は「経学家之部」「詩文家の部」とわかれた学者・詩人の評判記であり、「経学家」には太宰春台、「詩文家」には細井平洲などの名が見える。版元を「烏曾八百（うそはつぴやく）蔵版」としたうさ

んくささも含めて、やはり鷗外史伝とは一風かわった儒医たちへの視線を読むことができるだろう。

『伊澤蘭軒先生遺稿』（東京大学総合図書館所蔵）
https://doi.org/10.20730/100273243
4コマ目

それと時節柄、舩越敬祐著・烽山重春画『絵本黴瘡軍談』（天保九年刊、鶚軒文庫は後印本、請求記号DIG-TOKY-8）を挙げておきたい。インドの華陽夫人、中国の妲己、日本の玉藻の前と転生した邪気―このあたりはもちろん、高井蘭山著・葛飾北斎画『絵本三国妖婦伝』などで有名な妲己説話のもじり―が「急に死することもなく又急に治する事もな」い梅毒菌になりかわり、人々の迷信や思いこみにつけこんで暴れ回る物語である。対する医官・篤実淳直は、延寿丸・治瘡丸・黴効散・奇良湯の「薬将」を率いて黴毒大王に立ち向かう。こうした病と薬の合戦を描く見立て軍記物語は17世紀初頭以来のものだが（沢井耐三『医文車輪書――戦国武将の医術とユーモア――』）、本書は「実験究理」という言葉が随所にあらわれることも含めて、感染症の時代であった江戸の内部に育まれた実証思想のありどころを示す本である。

『絵本黴瘡軍談』（東京大学総合図書館所蔵）
https://doi.org/10.20730/100239511
19コマ目

新日本古典籍総合データベースの文庫情報

この誌面では、「新日本古典籍総合データベース」で公開中、または公開予定のコレクションを紹介いたします。

四天王寺大学人文社会学部　教授　須原　祥二

四天王寺大学所蔵の恩頼堂文庫

四天王寺大学の恩頼堂文庫（以下、「本文庫」と称する）は、古典籍・古文書の収集家である猪熊信男（一八八二～一九六三）の蔵書恩頼堂文庫の一部を、昭和四十二（一九六七）年に開校する予定だった四天王寺女子大学（四天王寺大学の前身）が、香川県の白鳥神社の神主家の流れをくむ猪熊家から直接入手したものである。

猪熊信男は蜂須賀家の分家に生まれ、明治二十八（一八九五）年に猪熊家の養子となった。京都帝国大学工科大学を中退後、京都で各種の公職を兼任しながら古文書・古典籍の収集をすすめた。昭和十六（一九四一）年には白鳥に戻り、地元で活動しながら蔵書整理をすすめた。恩頼堂文庫の全貌は、猪熊信男自身が昭和三十五（一九五九）年に作成した『恩頼堂蔵書目録略註』に略記されている。（以上、須原祥二「猪熊信男と恩頼堂文庫」（『埴生野』二、二〇〇三）参照）。

写真１　『般若心経秘鍵』
（STON－11470－00002）

本文庫は、『恩頼堂蔵書目録略註』にある古文書・古典籍類を中心とした「乙　櫃の部二七六五点」のうち、特に文化財的価値の高い冒頭二二一点を除いた古文書・古典籍を中核としている（『四天王寺国際仏教大学所蔵恩頼堂文庫分類目録』二〇〇三）。

所蔵資料には「恩頼堂文庫」の他に「猪熊家」の蔵書印をもつものもあり、猪熊信男以前の猪熊家に伝わっていた資料も混在している模様だが、前記二二一点を中心とする稀覯書については、彼が京都の古書肆を巡るなどして入手したものと考えられる。それらの残余となる本文庫においても、例えば写真１の版本のような中世資料も多く含まれている。

二〇一三年、空海請来の幻の本として紹介された『古今文字讃』についても、本文庫から異なる二種の写本が見出された（写真２）。

今後、デジタルデータとして公開されることで、多くの研究者の方々にますます活用していただけることを願ってやまない。

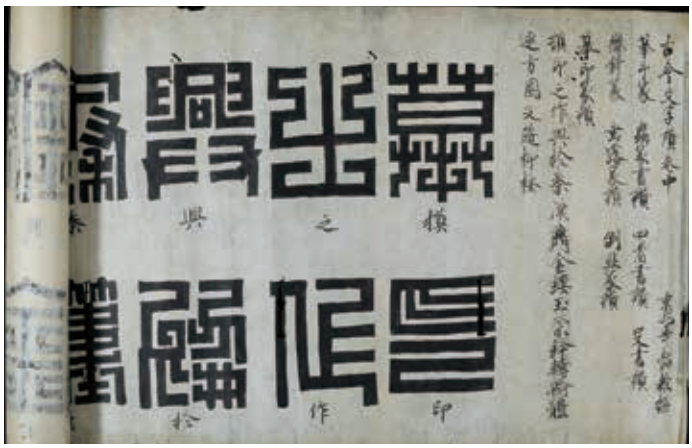


写真２　『古今文字讃』
（巻子2－2）

こんな古典籍があった！～拠点大学古典籍画像紹介～第9回

今回から専門機関の典籍も紹介していきます。

歴史的典籍NW事業では、二〇一五年度から、拠点大学における古典籍の撮影を実施しています。新日本古典籍総合データベースで公開された古典籍から、各拠点大学や専門機関おすすめの一点をご紹介していきます。

●広島大学図書館所蔵『花世姫（奈良絵本）』

URL:https://doi.org/10.20730/100344474

このたび広島大学図書館の画像提供により、同館所蔵の奈良絵本室町時代物語が新日本古典籍総合データベースで閲覧可能になった。その中に『花世姫』がある。同物語には絵入版本が存するが写本は稀で、戦前は鹿田静七蔵本と高野辰之蔵本が知られていたが、その後行方が知れず、現在は広大本が唯一の写本とされている。もと三巻三冊の本を二冊に改装した変則的な装幀で、どうやら広島文理科大学に入った鹿田本そのものと見られる。

（該当部分を見る：
https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/100344474/viewer/39）

●一橋大学附属図書館所蔵『大坂町絵図』

URL:https://doi.org/10.20730/100307019

歴史学者・幸田成友（一八七三～一九五四）が『大阪市史』の編纂主任をつとめた際に蒐集した史料のひとつ。近世大坂の町を詳細に描いた絵地図で、武家方、町方の色分けに加え、大坂三郷（北組、南組、天満組）の印も付されている。また、元禄元年以降の新地は年ごとに色分けして記録されており、大坂の町の発展の様子が伺える。

数ある「大坂三郷町絵図」の伝本のひとつと考えられ、今回の公開を機に、調査が進むことが望まれる。

（該当部分を見る：
https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/100307019/viewer/1）

※画像の転載や翻刻掲載などを希望される場合は、利用条件のページ（https://kotenseki.nijl.ac.jp/page/usage.html）を必ずご確認ください。

イベント報告

■八月五日(木)～六日(金)、第六回 関西教育ICT展がインテックス大阪(大阪市住之江区南港北)で開催され、昨年に引き続き、教育関係者に向けて「新日本古典籍総合データベース」を紹介しました。

新型コロナの感染拡大の影響により、昨年度より来場者数は少なかったものの、多くの方に無料で使えるデータベースであること、膨大な高精細画像を閲覧、ダウンロードできる点など好評をいただきました。

■十一月十一日(木)、第七回日本語の歴史的典籍国際研究集会をオンラインで開催しました。
https://www.nijl.ac.jp/pages/cijproject/sympo2021.html

活動報告

■神戸大学大学院人文学研究科人文学推進インスティテュートのセミナー(当センター共催)において、山本和明センター長が「人文学研究とDX―その展開と可能性―」と題し、デジタルヒューマニティーズに関する講演を行いました。

■EAJS2021において、"The future possibilities of DH in Japanese Studies(part2)"と題し、発表を行いました。

■The 31st EAJRS Conferenceにおいて、「オンライン画像を使った研究と図書館での研究」と題し、オンラインで発表を行いました。

ポーラ文化研究所所蔵の化粧文化に関する資料、高精細デジタル画像でオンライン閲覧が可能に

ポーラ文化研究所が所蔵する古典籍一七六冊と浮世絵三四九点を四月から「新日本古典籍総合データベース」で公開しました。ポーラ文化研究所が所蔵する古典籍・浮世絵の高精細デジタル画像の一括公開は今回が初となります。

国文学研究資料館と東海大学付属図書館データベース構築に関する覚書締結

東海大学付属図書館と、覚書を締結しました。

今後、東海大学が所蔵する「桃園文庫」(約二千点)のデジタル化を三年計画で進め、「新日本古典籍総合データベース」より順次公開していきます。

新日本古典籍総合データベースのお知らせ

■《タグ》を使った検索方法の紹介

【目次】が設定されている資料では、巻や章の見出しを選んで、そのコマへ移動ができます。トップページの検索窓に巻や章の名前を入れ「画像タグから探す」を選択することで検索を行うこともできます。

ふみ 第18号は、令和4(2022)年6月発行予定です。

■表題の背景色は浅縹(あさはなだ)です。『源氏物語』の「玉鬘」には「浅縹の海賦の織物、織りざまなまめきたれど、匂ひやかならぬに、いと濃き掻練具して、夏の御方に」とあり、光源氏が花散里へ贈った着物の色で、薄い青色をしています。

■本誌「ふみ」各頁の背景は当資料館蔵の『方丈記』(本阿弥光悦流の書体を模刻した嵯峨本)を利用しています。

■表題「ふみ」の書体は、石川島造船所(現IHI)創業者の平野富二が明治十二年六月に刊行し当館所蔵の「BOOK OF SPECIMENS」(活版印刷見本帳)を利用しています。

ふみ
「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画」ニューズレター
第17号
〈発行日〉
令和4(2022)年1月14日
〈編集・発行〉
国文学研究資料館
古典籍共同研究事業センター
〒190-0014
東京都立川市緑町十一三
TEL 050-5533-2988
FAX 042-526-8883
http://www.nijl.ac.jp/pages/cijproject/

『春日懐紙』がご覧になれます。
携帯電話又はスマートフォンのアプリ等で、左記のQRコードを読み取りご覧ください。

リサイクル適性Ⓐ
この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。